研修報告

令和 4 年 10 月 29 日（土）

「今、子ども達にとって必要な支援とは？」
～ＩＣＦ-ＣＹやＦ-words の枠組みの中で私たちが持つべき視点～

基調講演
「子どもの味方であるための子どもの見かた」
～子どもの権利と ICF-CY～
一般社団法人　全国児童発達支援協議会　理事　光真坊浩史氏

ICF とは「国際生活機能分類」と和訳され、ICIDH の改訂版である。ICIDH が「障害」を 3 つのレベルで整理し、社会的視点を導入した功績を引き継いでいる。ICF は「障害」を「生活機能」で捉えるという意味で「生活モデル」である。また「環境因子」と「個人因子」を導入しているため、より個別性の高いモデルとなる。さらに「個別因子」を変化させられないものではなく、生活機能に影響を及ぼす主観も含む重要な因子と捉えている。（つまり、個人因子へのアプローチが非常に大事）
◎「ICIDH」の誤解と課題
・「障害」を 3 階層から個人の問題としてとらえる
・一方向でネガティブに捉えられる
・「できない」という表現で示される
◎「ICF」の特徴（良さ）
・「障害」は個人に帰属するものと捉えるだけでなく、様々な環境要素を含めて包括的に捉える
・「障害」等があっても「～があれば～できる」と捉える
・「できない」だけでなく、「できる」部分（能力）と「している」部分（実行状況）にも焦点を当てる（特に活動と参加）

「個人因子」が非常に重要な理由（環境因子が重視されがちだが個人因子が密接に関係）
⇒支援者の対応が、子どもの「個性」に大きな影響を与える。特に成長、発達過程の人格形成期（自己理解・障害受容・自尊心等）の子どもには働きかけが必要。プラスの援助、マイナスの支え（家族支援も含む）自己決定を支える（日々の関わりの重要性）

活動や参加を実現するためには各職種から様々な提案がなされて策を考えていく事が重要。
（多職種協働＝チーム支援）
「F-words！Forward！」

～F-words でより良い未来を！～
堺市立重症心身障がい者（児）支援センター　ベルデさかい　松本茂樹氏

心身機能・身体構造=Fitness　活動＝Functioning 参加＝Friends
環境＝Family 個人因子＝Fun
さらにこれに Future を追加して 6 つの F をキーワードにおいて考える。

Future
「達成感」から育む自己肯定感
・達成感「できた」→有能感「できる」「やれる」効能感「役に立つ」→自己肯定感
（活動の感覚）　（達成感の強化）
僕・私はこれでいいのだ！（多様な活動での醸成）
未来に必要な力は、自己肯定感を感じる力（今の達成感の蓄積）よって今が大事。
Fun
　達成感は感覚！　できたという感覚を共有出来たり提供できたりすることが大事。
　感覚の組み合わせを感じて（知覚）理解する
Functioning
　子どもにとっての遊びは「仕事」
　潜在能力の発揮、活動の達成を目指す≠運動
　私たち支援者が経験のはく奪の可能性があることを認識する必要がある
Family
　子どもの不適応行動は親のストレススコアに大きく影響する
　子どもからみた家族だけではなく、家族から見たその子の視点も大事
Fitness
　運動プログラムが障がい児に有益なのはわかるが、身体活動を維持するのに遊び・レクリエーションの機会が大事で必要です。（身体・心の発達）
Friends
　地域支援も含めた仲間作り
　人は自分と似通った仲間を求める（普遍的体験による安心感）
　人は他人に受け入れられることで安心する（受容される体験と自己受容）
　人は他人に認められることで自分を確認する（他者からの承認と自己確認）
　人は他人の役に立つことで喜びを感じる（愛他的行為と自己尊重）
　人は自分を確立する物差しを求める（自己確認から自己評価）
　人はモデルを求める（模倣修正と自己確立）